

近世における將軍家と大名家間の刀劍贈答

野田 ゆりえ

要旨

本稿では、『寛政重修諸家譜』により、将軍家と大名家間で行われた刀剣贈答リストを作成し、そのデータ処理を基に、献上・下賜の理由や、前期に用いられた刀工の格付け、また、八代将軍徳川吉宗が行った刀工調査などについて明らかにした。

『寛政重修諸家譜』(以下、『寛政譜』と略す)により、将軍家と大名家との刀剣贈答に関する記事を抽出すると、一八四一件みられる。歴代将軍ごとにみると、三代将軍徳川家光のときから飛躍的に増加し、五代将軍綱吉のときにピークに達している。六代将軍家宣・七代将軍家継の時期は、在職年数が少ないため極端に減少している。八代将軍吉宗期以降は、二〇〇〜一〇〇〇件前後に定着している。右の結果から、八代吉宗期に、刀剣贈答に関して画期があったことがわかる。

刀剣の献上と下賜についてそれぞれの場合の理由をみていくと、大名家から将軍家への刀剣の献上は、家督相続御礼のときの献上が最も多く、四四四件(約五四%)を占め、ついで多いのが、致仕(隠居)御礼である。将軍の代ごとでは、四代家綱、五代綱吉の時期に多い。八代吉宗時代、享保七年(一七二二)を境に、家督相続・致仕御礼のときの刀剣献上はほとんどみられなくなる。これは、同年七月に発令された「家督御礼に関する法令」によるものと思われ、家督御礼時に献上される品物が法令によって決められたため、その献上が『寛政譜』に記載されなくなったものと推測できる。大名の石高別にみると、家督相続・致仕御礼とも、石高分布は幅広く、五万石未満層も多い。つまり、刀剣献上に関しては、大名だけでなく、小大名も行っていたということを示しているといえよう。

将軍家から大名家への刀剣下賜では、暇乞のときの下賜が最も多く、二八五件(約二八%)を占める。これを将軍の代ごとに見ると、八代吉宗期が六五件と多く、他の時期は三〇件前後であり変化はみられない。ついで、褒美、大名邸への御成り、御前での元服祝いなどの際の下賜である。暇乞時の下賜は、一〇万石以上、とくに二〇万石以上の大名に多い。これに対し、褒美として下賜された場合は、石高との関連性はみられない。

さらに、贈答に用いられた刀剣はいかなる格付けを有していたのかを知るため、「刀剣書」の一つとして、聖心女子大学図書館蔵「諸国鍛冶代目録」の内容を紹介した。この史料は、現在のところ旧蔵者は不明であり、刀工たちは一人ずつ、「無上別 三千貫」から「用之下 七貫」まで三六段階の格付けが示されている。とくに多いのが、「下之下 一〇〇貫」の三四三名である。寛政期に作成さ

れた可能性が高いが、登録された一五九七名の刀工は全て古刀の刀工である。ここに当時の古刀重視の傾向があらわれている。こうした古刀重視の傾向は、七代将軍家継時代以前に、贈答に用いられた刀の銘をみても明らかである。家督相続御礼時の献上、暇乞時の下賜に使われた主な刀工の格付けについてみると、献上・下賜とも、この「諸国鍛冶代目録」に登録された、格付けの高い正宗・吉光・貞宗などを筆頭に、二三位くらいまでの刀剣が用いられていた。

八代将軍徳川吉宗は、かかる傾向を是正しようとし、将軍就任後、本阿弥家に命じ、将軍家をはじめ、諸大名家にある有名な刀剣（太刀・刀・脇指・短刀）の銘と由緒、寸尺、代付けなどを調べて提出させた。これが「享保名物帳」である。この「名物帳」には平安時代から南北朝時代に至る古刀一六八口の刀剣が登録され、いわゆる「名刀」とその所蔵先がほぼ確定された。その一方で吉宗は、享保四年（一七一九）諸大名に命じ、領内に住む刀工を調査させた。その結果、二七七人の刀工の姓名が将軍へ上申され、「殊に精巧なる」刀工五四人は刀剣を吉宗に献上した。なかでも、薩摩藩領内の刀工玉置小市安平と宮原正清は江戸に召されて、浜御殿で作刀を命ぜられたという。このような江戸時代の現代刀Ⅱ新刀も、その後贈答に用いられるようになったものと思われるが、この点の解明は今後の課題としたい。

はじめに

刀剣は、中世以来、武家の主要な贈答品として用いられてきた¹。これは、近世、江戸時代においても変わらない。家督相続時における、大名家の將軍家への献上品について考察した高橋聖子氏は、『徳川実紀』の分析により、「三代家光期に入ると相続時献上全体を通して、刀剣類が約九割の割合で献上されていることが判明した」と指摘している²。そして高橋氏は、八代將軍徳川吉宗時代、享保七年（一七三二）七月に発令された法令に着目し、「これ以降献上する太刀・刀は上限金二〇枚に抑えられた」ことを明らかにした。一方、母利美和氏は、肥前国における刀剣贈答について究明した論考のなかで、「新刀の贈答は、江戸時代前期にはほとんど見られず、江戸後期からしばしば見られるようになり（中略）相対的な量としては、中品・下品がかなり贈答品としての比重を占めていた」と指摘している³。両氏の研究から、贈答に使用された刀剣の格付けが享保期以降に変化していることがうかがえる。

本稿では、『寛政重修諸家譜』により、將軍家と大名家間で行われた刀剣贈答リストを作成し、それを基に、献上・下賜の理由や、前期に用いられた刀工の格付け、また、八代將軍徳川吉宗が行った刀工調査などについて明らかにしたい。

第一章 刀剣贈答の変遷

『寛政重修諸家譜』（以下、『寛政譜』と略す）により、將軍家と大名家との刀剣贈答に関する記事を抽出すると、一八四一件みられる。これを歴代將軍ごとにみたのが、表1である。同表によると、三代將軍徳川家光のときから

飛躍的に増加し、五代将軍綱吉のとき、ピークに達している。六代将軍家宣・七代将軍家継の時期は極端に減少しているが、これは、在職年数が少ないからとみられる。八代将軍吉宗期以降は、二〇〇〇～一〇〇〇件前後に定着している。

右の結果から、八代吉宗期に、刀剣贈答に関して画期があったことがわかる。

第一節 大名家から将軍家への刀剣献上

表2は、歴代将軍ごとの、大名家から将軍家への刀剣献上についてみたものである。これによると、家督相続御礼のときの献上が最も多く、四四四件(約五四%)を占めている。ついで多いのが、致仕(隠居)御礼である。両者を合わせると五九八件(約七二%)に達する。つまり、大名家の刀剣献上は、大半、家督相続と隠居時に行われていたといえよう。これは大名家にとって家督相続がいかに重要であったかを示しているといえよう。

将軍の代ごとにとみると、四代家綱、五代綱吉の時期に多い。六代家宣・七代家継期の減少は在職年数が少ないからとみられる。問題は八代吉宗の時期である。吉宗時代、享保七年(一七二二)を境に家督相続・致仕御礼のときの刀剣献上はほとんどみられなくなる。これは、同年七月に発令された「家督御礼に関する法令」⁴によるものと思われる。すなわち、家督御礼時に献上される品物が法令によつて決められ、すべての大名が太刀を献上することになったため、その献上が「寛政譜」に記載されなくなったものと推測できる。逆に見ると、それまでの家督相続・致仕時の刀剣献上は大名家の任意によるものと考えられる。

表3と表4は、家督相続・致仕時の刀剣献上を石高別にみたものである。両者とも、石高分布は幅広く、目立った特徴は見られない。五万石未満層が多いのは、それだけ大名の数が多いためと思われる。つまり、刀剣献上に関

しては、大大名だけでなく、小大名も行っていたということを示しているといえよう。

第二節 将軍家から大名家への刀剣下賜

表5は、歴代将軍ごとの、将軍家から大名家への刀剣下賜の理由についてみたものである。同表によると、暇乞のときの下賜が最も多く、二八五件(約二八%)を占める。これを将軍の代ごとにもみると、八代吉宗期が六五件と多く、他の時期は三〇件前後であり変化はみられない。ついで多いのは、褒美、大名邸への御成り、御前での元服祝いなどの際の下賜である。大名邸への御成りのときの下賜は、五代綱吉期に集中している。これは、綱吉の大名邸への御成り、ことに柳沢吉保邸への御成りが頻繁に行われていたためと思われる⁵⁾。

表6と表7は、暇乞時と褒美のときの刀剣下賜を石高別にみたものである。暇乞時の下賜は、一〇万石以上、とくに二〇万石以上の大大名に多い。これに対し、褒美として下賜された場合は、石高との関連性はみられない。暇乞時に刀剣を下賜される大名は、具体的にどのような大名なのか、今後検討する必要があるといえよう。

第二章 「刀剣書」にみる刀工の格付けと新刀奨励

ここでは、贈答に用いられた刀剣はいかなる格付けを有していたのか、また、八代将軍徳川吉宗が行った刀剣改革についてみてみたい。

第一節 江戸前期における刀工の格付け

刀工の格付けを知るためには、いわゆる「刀剣書」を捜す必要がある。その一つとして、聖心女子大学図書館に「諸国鍛冶代目録」という史料が所蔵されているので、まずその内容を紹介したい。この史料の冒頭には「阿部家文庫」の印が押してあり、旧蔵者を示しているものと思われるが、現在のところ、どここの阿部家なのか不明である。ついで、「中心有之分、年号寛政元酉歲迄何百年ニ成ト言コトヲシルス」とあり、「和銅」から「文龜」までの年号と、それぞれの寛政元年(二七八九)までの年数が記載されている。したがって、この史料は寛政元年に作成された可能性が高い。

つぎに、「諸国鍛冶代目録^(てま)」とあり、「無上別 三千貫」から「用之下 七貫」まで三六段階の格付けがなされ、「右者鍛冶之位ト代付次第也」と記載されている。さらに、「無上之位之叟」「真之上之事」「草之極之事」などの説明が書かれたのち、「國行 大和住 一代此銘ヲ打、真ノ上作、寛元ノ頃」のように、一人宛、刀工の名前・住居・格付け・時期などが記されている。

表8は、格付けごとの刀工の人数を調べたものである。格付けの記載がない者も含め、一五九七名の刀工が登録されている。とくに多いのが、「下之下 一〇〇貫」の三四三名(約二一%)である。このように、多くの刀工が記載されているにもかかわらず、この史料に登録された者は、全員江戸時代以前の刀工、つまり古刀の刀工である。寛政という江戸時代の後期に作成された刀工の名簿でありながら、江戸時代の刀工に新刀の刀工が一人も登録されていないところに、当時の古刀重視の風潮を窺うことができる。

古刀重視の傾向は、江戸前期、七代将軍家継時代以前に、贈答に用いられた刀工名をみても明らかである。表9は、家督相続御礼時の献上、暇乞時の下賜に使われた主な刀工の格付けについてみたものである。献上・下賜とも、「諸

国鍛冶代目録」に登録された、格付けの高い正宗・吉光・貞宗などを筆頭に、二三位くらいまでの刀剣が用いられていることがわかる。

かかる傾向を是正しようとしたのが、八代將軍徳川吉宗である。

第二節 八代將軍徳川吉宗の新刀奨励と刀工調査

八代將軍徳川吉宗は、將軍就任後、刀剣の鑑定を職とする本阿弥家に命じ、將軍家をはじめ、諸大名家にある有名な刀剣(太刀・刀・脇指・短刀)の銘と由緒、寸尺、代付けなどを調べて提出させた。これが「享保名物帳」である。この「名物帳」には平安時代から南北朝時代に至る古刀一六八口の刀剣が登録され、いわゆる「名刀」とその所蔵先がほぼ確定された。

その一方で吉宗は、「世人専ら古刀を貴ぶの弊ありて、新製は利刀にても、好む人少きに至れり」として、享保四年(一七一九)諸大名に命じ、領内に住む刀工を調査させた。その結果、二七七人の刀工の姓名が將軍へ上申されたという。その内、「殊に精巧なる」刀工五四人(表10)は刀剣を吉宗に献上した⁷。なかでも、薩摩藩領内の刀工玉置小市安平と宮原正清は江戸に召されて、浜御殿で作刀を命ぜられたという⁸。

このような江戸時代の現代刀⁹新刀も、その後贈答に用いられるようになったものと思われるが、この点の解明は今後の課題としたい。

おわりに

本稿では、主に数量的分析により、刀剣の献上・下賜の実態について考察した。以下、簡潔にまとめておきたい。『寛政重修諸家譜』によると、将軍家と大名家との刀剣贈答は一八四一件みられる。時期的に見ると、三代家光期に飛躍的に増加、五代綱吉期にピークに達し、八代吉宗期以降は、二〇〇〜一〇〇件前後に定着している。これを献上・下賜に分けると、献上は大名家の家督相続と致仕(隠居)時が大半を占め、下賜は、暇乞時、褒美、大名邸への御成り、御前での元服祝いなどのときが多い。吉宗期に数量が定着するのは、家督相続・隠居時の刀剣献上が『寛政譜』に記載されなくなるためであり、刀剣献上が行われなくなったからではない。

江戸前期、七代家継期までに贈答に用いられた刀剣は、古刀で、しかも比較的格付けの高い刀剣であった。しかし、八代吉宗はかかる傾向を是正しようとし、当時の現代刀Ⅱ新刀を作成する、全国的な刀工の調査を行った。以降は、徐々にではあるが、このような新刀も贈答品として使われるようになるものと推測される。

註

- 1 五福伊八郎「鎌倉時代の武家社会における誕生儀礼と社会秩序」『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第四二号、二〇一四年、佐藤豊三「室町時代の刀剣贈答について」徳川黎明会編『金鯰叢書…史学美術史論文集』第一五輯、思文閣出版、一九八八年、藤田達生「刀剣書の成立…『諸国刀鍛冶系図写』を素材として」『三重大学教育学部研究紀要』五一号、人文・社会科学、二〇〇〇年、一五七―一八二頁。

- 2 高橋聖子「大名家の献上品にみる幕藩関係―家督御礼を中心に―」『聖心女子大学大学院論集』三六巻一号、二〇一四年、

参照。

- 3 母利美和「武家儀礼と刀剣―江戸時代の刀剣贈答を中心に」『月刊文化財』一九八九年八月号、第一法規出版、三〇―三七頁。
- 4 高橋聖子「大名家の献上品にみる幕藩関係 ―家督御礼を中心に―」『聖心女子大学大学院論集』三三巻一号、二〇一四年、三四―三六頁、参照。
- 5 佐藤豊三「將軍家「御成」について(八)」、徳川黎明会編『金鯢叢書…史学美術史論文集』第一一輯、思文閣出版、一九八四年、参照。
- 6 辻本直男「図説 刀剣名物帳」雄山閣出版、一九七〇年。
- 7 鍋島加賀守直英と松平丹後守吉茂が、ともに播磨忠国の刀剣を献上しているため、五四名とした。
- 8 「有徳院殿御実紀附録」、『新訂増補 国史大系 徳川実紀』第九編、吉川弘文館、二六七―二六八頁、参照。
- 9 「文化九年(一八一二)、家督相続により御礼登城した井伊直亮は、新刀の肥前忠吉の刀を献上した。(中略)新刀の贈答は、江戸前期にはほとんど見られず、江戸後期からしばしば見られるようになり(中略)相対的な量としては、中品・下品がかなりの贈答品としての比重を占めていた」。母利美和「武家儀礼と刀剣―江戸時代の刀剣贈答を中心に」『月刊文化財』一九八九年八月号、第一法規出版、三六―三七頁より抜粋。

近世における将軍家と大名家間の刀剣贈答

表1 慶長8(1603)―寛政10年(1798)間の将軍家代ごとの刀剣贈答件数

時期	将軍就任(西暦)	在職年数	贈答合計件数
初代家康	1603	2	25
2代秀忠	1605	18	49
3代家光	1623	28	339
4代家綱	1651	29	299
5代綱吉	1680	29	416
6代家宣	1709	4	153
7代家継	1713	3	87
8代吉宗	1716	29	225
9代家重	1745	15	87
10代家治	1760	27	115
11代家斉	1787	11	46
合計			1841

※将軍就任は征夷大将軍就任時の西暦

※在職年数については、3ヶ月未満は切捨て、4ヶ月以上は繰上げ
 出典：統群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)より作成。

表2 大名家から将軍家への刀剣献上の理由と件数

理由 時期	家督相続御礼	致仕御礼	成り大名邸への御	服・御誕生御祝 御七夜・御元	猿楽台覧、饗宴 に召される	御膳・点茶献上、 戚関係	将軍家との姻	その他	合計
初代家康	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2代秀忠	1	0	2	0	0	0	5	8	
3代家光	51	6	6	3	15	5	53	139	
4代家綱	149	47	3	4	1	0	19	223	
5代綱吉	136	56	14	0	1	3	24	234	
6代家宣	46	17	8	0	0	2	8	81	
7代家継	25	11	0	0	0	0	0	36	
8代吉宗	34	14	1	4	0	9	19	81	
9代家重	2	2	0	3	0	4	2	13	
10代家治	0	1	0	7	0	0	1	9	
11代家斉	0	0	0	3	0	0	0	3	
合計	444	154	34	24	17	23	131	827	

出典：統群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)より作成。

表3 石高別の刀剣贈答件数(家督相続御礼の際の献上)

大名 時期	20万石以上	10万石以上 20万石未満	5万石以上 10万石未満	5万石未満	合計
初代家康	0	0	0	0	0
二代秀忠	0	0	0	1	1
三代家光	10	9	7	25	51
四代家綱	16	16	34	83	149
五代綱吉	13	13	25	85	136
六代家宣	8	2	9	27	46
七代家継	1	0	9	15	25
八代吉宗	2	4	8	20	34
九代家重	0	1	0	1	2
十代家治	0	0	0	0	0
十一代家斉	0	0	0	0	0
合計	50	45	92	257	444

出典：統群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)より作成。

表4 石高別の刀剣贈答件数(致仕御礼の際の献上)

大名 時期	20万石以上	10万石以上 20万石未満	5万石以上 10万石未満	5万石未満	合計
初代家康	0	0	0	0	0
二代秀忠	0	0	0	0	0
三代家光	0	2	2	2	6
四代家綱	7	7	13	20	47
五代綱吉	8	8	9	31	56
六代家宣	0	4	6	7	17
七代家継	0	0	3	8	11
八代吉宗	1	0	2	11	14
九代家重	0	0	1	1	2
十代家治	0	1	0	0	1
十一代家斉	0	0	0	0	0
合計	16	22	36	80	154

出典：統群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)より作成。

近世における将軍家と大名家間の刀剣贈答

表5 将軍家から大名家への刀剣下賜の理由と件数

理由 時期	暇乞返礼	褒美	大名邸への御成り	御前での元服祝い	行事(誕生・御七夜・婚礼の儀)での役付	将軍家との姻戚関係	臨時の役職へ任命	御膳・点茶献上、猿楽台覧、饗宴に召される	将軍の御遺物分け	その他	合計
初代家康	0	9	3	1	0	0	0	0	0	12	25
二代秀忠	2	2	14	7	0	4	1	0	0	11	43
三代家光	26	21	12	9	6	7	2	17	0	100	200
四代家綱	13	5	12	16	1	0	2	4	0	23	76
五代綱吉	36	14	61	20	6	14	0	4	0	27	182
六代家宣	34	15	5	1	8	0	0	1	2	6	72
七代家継	35	8	0	2	2	0	1	0	2	1	51
八代吉宗	65	13	2	17	12	11	0	0	1	23	144
九代家重	29	5	0	17	8	1	2	0	0	12	74
十代家治	30	14	4	12	18	6	7	0	1	14	106
十一代家斉	15	4	0	9	6	0	1	0	0	8	43
合計	285	110	113	111	67	43	16	26	6	237	1014

出典: 続群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)より作成。

表6 石高別の刀剣贈答件数(暇乞時の下賜)

石高別 時期	20万石以上	10万石以上 20万石未満	5万石以上 10万石未満	5万石未満	合計
初代家康	0	0	0	0	0
二代秀忠	1	1	0	0	2
三代家光	17	4	1	4	26
四代家綱	4	2	2	5	13
五代綱吉	15	8	4	9	36
六代家宣	16	10	6	2	34
七代家継	16	9	7	3	35
八代吉宗	34	18	8	5	65
九代家重	18	2	7	2	29
十代家治	14	5	8	3	30
十一代家斉	1	3	2	9	15
合計	136	62	45	42	285

出典：統群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)より作成。

表7 石高別の刀剣贈答件数(褒美としての下賜)

石高別 時期	20万石以上	10万石以上 20万石未満	5万石以上 10万石未満	5万石未満	合計
初代家康	0	0	0	9	9
二代秀忠	0	0	0	2	2
三代家光	7	4	6	4	21
四代家綱	0	1	2	2	5
五代綱吉	1	4	6	3	14
六代家宣	2	3	6	4	15
七代家継	1	1	5	1	8
八代吉宗	0	4	7	2	13
九代家重	2	1	2	0	5
十代家治	1	2	8	3	14
十一代家斉	1	2	1	0	4
合計	15	22	43	21	110

出典：統群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)より作成。

近世における将軍家と大名家間の刀剣贈答

表9 7代家継以前の刀剣献上・下賜に使用された主な刀工

	刀工名	件数	格付け	
献上(家督相続御礼)	正宗	17	1 無上別	3000 貫
	吉光	4	1 無上別	3000 貫
	貞宗 (保昌五郎)	12	2 無上	2000 貫
	来国次	8	2 無上	2000 貫
	越中則重	9	3 真上/別上	1500 貫
	行光	12	6 真中	1000 貫
	備前長光	8	7 行上	900 貫
	左安吉	4	7 行上	900 貫
	来国俊	16	8 行中	750 貫
	備前守家	6	8 行中	750 貫
	来国光	29	9 真下	700 貫
	備前兼光	12	13 上之中	400 貫
	雲次	6	15 上之下	300 貫
	備前元重	8	15 上之下	300 貫
	備前近景	4	20 下之中	125 貫
	了戒	4	20 下之中	125 貫
左弘安	4	23 外上ノ中	80 貫	
下賜(暇乞時)	貞宗 (保昌五郎)	3	2 無上	2000 貫
	行光	6	6 真中	1000 貫
	備前長光	5	7 行上	900 貫
	光忠	5	7 行上	900 貫
	来国光	15	9 真下	700 貫
	左弘安	3	23 外上ノ中	80 貫

※統群書類従完成会編『新訂 寛政重修諸家譜』第1-22(1964-1966年)、及び『諸国鍛冶代目録』(聖心女子大学図書館蔵)より作成。

表8 「諸国鍛冶代目録」にみる刀工の格付け

順位	刀工の格付け		人数
1	無上別	3000 貫	4
2	無上	2000 貫	2
3	真上/別上	1500 貫	17
4	別上中	1300 貫	1
5	別上下	1050 貫	3
6	真中	1000 貫	4
7	行上	900 貫	5
8	行中	750 貫	11
9	真下	700 貫	4
10	行下/草上	600 貫	9
11	上之上	500 貫	19
12	草中	450 貫	5
13	上之中	400 貫	36
14	草下	350 貫	12
15	上之下	300 貫	17
16	中之上	250 貫	29
17	中之中	200 貫	30
18	中之下	175 貫	15
19	下之上	150 貫	39
20	下之中	125 貫	64
21	下之下	100 貫	343
22	外上ノ上	90 貫	11
23	外上ノ中	80 貫	69
24	外上ノ下	70 貫	78
25	外中ノ上	60 貫	95
26	外中ノ中	55 貫	43
27	外中ノ下	50 貫	103
28	外下ノ上	45 貫	36
29	外下ノ中	40 貫	144
30	外下ノ下	35 貫	77
31	出来ノ上	30 貫	80
32	出来ノ中	25 貫	53
33	出来ノ下	20 貫	86
34	用之上	15 貫	21
35	用之中	10 貫	11
36	用之下	7 貫	7
-	記載なし	記載なし	14
合計			1597

※順位については貫高順とした。
出典:『諸国鍛冶代目録』(聖心女子大学図書館蔵)

表10 刀工調査により献上された刀工名とその格付け

刀工が属する藩の大名 及び刀工の住居	刀工名	格付け
鍋島加賀守直英	播磨忠国	銀7枚
小笠原右近将監忠雄	高田政平	
戸澤上野介正庸	羽州長恒	
松平紀伊守信峯	利重	
松平長門守利興	越中清光	前頭2両
木下右衛門佐俊量	槌景行	
相馬弾正少弼尊胤	伏見広近	
丹波左京大夫秀延	法心重道	
内藤備後政樹	鈴木貞則	
米倉主計忠仰	小笠原長宗	
水野日向守勝政	島田助宗	
井伊掃部頭直惟	下総兼正	
藤堂和泉守高敏	陸奥歳長	
溝口信濃守直治	小林正永	
松平越後守宣富	濃州兼景	
関備前守長治	播磨重高	
松平(池田)大炊頭継政	上野祐定	前頭2両
阿部伊勢守正福	島田義助	
松平中務大輔宗昌	伊勢国次	
戸田山城守忠真	法成寺吉次	
酒井雅楽頭親愛	関吉門	
毛利讃岐守匡広	玉井清盈	
松平讃岐守定直	和泉国輝	前頭2両
松平右近将監清武	下坂継正	
石川主殿頭総慶	水田国重	前頭6両
仙石信濃守政房	関兼光	
立花飛騨守鑑任	下坂親信	
土井大炊頭利実	高田本行	
津軽出羽守信寿	橘森宗	
松平(柳澤)甲斐守吉里	後藤盛長	
本多唐之助忠時	大和国武	
戸田采女正氏定	志津兼氏	
松平市正親純	高田正行	

松平肥後守正容	若狭道辰	
細川越中守宣紀	大和忠行	
尾張家	伯耆信高	前頭3両
尾張家	寿命	
酒井修理大夫忠音	若狭冬広	
松平丹後守吉茂	播磨忠国	
紀伊家	直茂	
紀伊家	直勝	
松平(前田)加賀守綱紀	近藤金行	
松平(島津)薩摩守吉貴	玉置小市安平	
松平(島津)薩摩守吉貴	宮原正清	関脇20両 / 金3枚
松平(鍋島)筑前守継高	信国	銀4枚
松平(鍋島)筑前守継高	重包	銀4枚
京	助宗	
京	久通	
河内国	輝邦	
武蔵国多摩郡	康重	
武蔵国多摩郡	利長	
武蔵国多摩郡	国重	
武蔵国多摩郡	宗重	前頭1両
武蔵国多摩郡	藤五康重	
武蔵国多摩郡	安国	前頭3両

※格付けについては以下の番付表を参照した。
 「新刀名剣鑑」『江戸自慢』八、東京都立中央図書館蔵特別買上文庫、
 一夢庵小蝶筆「古刀方新刀方為御覧 初編 二編ト見合可一覽」、同
 「古刀方新刀方為御覧 二編 初編ト見合可一覽」『松迺寿』二、東京
 都立中央図書館蔵東京誌料。